



縄文柴犬の飼い方シリーズ

縄文柴犬との暮らし方

この文章の構成は以下のようになっています。

- ◇ 1. 縄文柴仔犬の飼い方 ◇
- ◇ 2. 縄文柴犬の食餌 ◇
- ◇ 3. 縄文柴犬と暮らす ◇
- ◇ 4. 繁殖について ◇
- ◇ 5. 質問・疑問に答えて ◇



◇ 1. 縄文柴 仔犬の飼い方 ◇

主な項目 (1) 前もって準備すること

(2) 仔犬との出会い

(3) 2日目から1週間

(4) 自治体への届け出

(5) お願い-引き継ぎ事項として

(1) 前もって準備すること

① 仔犬の受入れ場所

〔ケージ〕

一般的に今日の様々な事情から判断して、仔犬はおよそ6カ月近くまで主としてケージで飼育する方が良いと思います。

従って、適当な大きさのケージ（縦横奥行きなどが約50cm位を目安）を準備します。



〔手作り〕



風通しが良く・南向きが良い

夏は日陰・冬は日差しが入る

自分で作る場合は、

一日に約3時間の日照が条件の環境を考え、出来ることならある程度の通風が得られる場所にコンクリートブロックなどで床を高くし、約畳1枚分の床面積を確保し出入口を設け、天井までフェンスなどでしっかり囲い、中には寝箱（縦横奥行き50cm位）を用意します。

※ポイント

前記いずれの場合でも、時々、少しでも良いですから場所や環境を変えてやれる事が大切です。そして、何事もはじめのある暮らしを基本にします。首輪や引き綱はまだ当分は不要です。

②家族皆で話し合う(注意点)

〔犬の気持ちを考えて〕

先ず、仔犬の立場で考えてみましょう。
慣れ親しんだ所から、
急に知らない人や臭いのところに連れて来られました。
仔犬は不安で一杯です。

新しい飼い主が一方的に、いくら可愛いからと言って
抱いたり頭を撫ぜたりしても
仔犬はどんな気分なのでしょうか。
新しい飼い主がしてやれる事は、この仔犬の気持ちを考えて、
不安を解きほぐしてやるための環境作りです。
その第一は、しつこく接しない事です。

〔始めて接するときの注意〕

始めて接する場合、仔犬の頭上から手を出さないようにします。
(これは、オトナの犬に対しても同じです)
小さな仔犬の目線を考えると、
頭上から接する事は大変威圧的に感じてしまうのです。

〔仔犬を追いかけない〕

安全な場所で仔犬を放し、排尿便などをさせたりします。
その時、仔犬が急に走りだしても決して追いかけて捕まえない事です。
手元に仔犬が寄って来るのを静かに待ちます。

〔驚かせない〕

例えば、家族に子供さんなどが居た場合、
仔犬が寄って触れたら突然大声で「キャー」等と高い声を出して、
驚かさないう様に前もって話し合ってください。

当然、金属音などびっくりさせる事は禁物です。
仔犬が新しい環境に慣れるまでの間、優しく静かに、待ってください。



〔抱っこして仔犬が舐めにきたら〕

仔犬を抱いたとき、舐めに来たらそれを受け入れて下さい。
以降からこの挨拶行為については「舐め合う」と表現します。
また、この行為についてここで更に詳しくは触れられませんが、
犬の気持ちを受け入れると言う意味で大変に大切な関係を残してくれる筈です。



〔いい事は褒める〕

家族の一員として仔犬を受け入れた訳ですから、何か良い事があったら必ず「褒める」と言う事が、人と犬の共存の始まりです。

例えば、「良くできたね!」「いいこね!」等と、優しく、心から嬉しく思っている事を伝える。この「褒める」と言う事を、家族の皆さんが必ず同じような態度で実行して下さい。



〔間食は絶対に与えない〕

仔犬が可愛いから、と言って食べ物を与えて育てると、やがて我慢の出来ないわがままな犬になってしまいます。
その事を、家族で良く話し合ってください。
(前項の様に、言葉や態度で「褒める」事が、何よりのご褒美なのです。)

※ポイント

仔犬との良い関係を成立させる上で大切な事は、特に最初の2～3日間、休養を充分に取らせる事といじりすぎない事です。



(2) 仔犬との出会い

① 仔犬との対面

〔輸送箱の扉を開ける前に〕

送られてきた輸送箱の扉を開ける前に、次の事を確認して下さい。

仔犬が歩き回っても安全か？

(危険な箇所・もぐり込めるようなすき間…)

排尿・排便の場所は？

(玄関内などの場合は、新聞紙などを敷く)



〔先ず、仔犬の排尿から…〕

新しい環境では、先ず、仔犬が落ちつける場所で排尿便をする筈です。

仔犬は始めて知った、その辺りの臭いを確かめたりしますので

その様子を静かに見守りましょう。



そして、最初に家族の責任者（仔犬の立場からはボスになる人）が、

仔犬の名前を呼んで優しく抱き上げます。

もし、このとき仔犬が舐めに來たら受け入れて下さい。

② 仔犬の食餌

〔初めての食餌は 少なめに与える〕

遠方から送られて來た場合、仔犬は大変疲れた状態です。

餌はやや控えめにし、早くケージに入れて休ませて下さい。



〔少なめの量と内容は〕

その控えめの食餌の内容や量については、仔犬の個体により多少違いますので、その点を前もって良く確かめましょう。

大体の目安として

生後60日令の仔犬の場合は約150 ～200 ccの水（冬はぬるま湯）に、ご飯を大さじ 2杯、小さめの煮干し2 ～3 匹、煮た野菜少々程度で一食分とします。

ネギ類などは食べさせない。

③ 2日目からの数日

〔ドライフードを少し〕

翌日からの食餌は、昨夜の食餌の内容に加え市販の仔犬用（繊維の少ない）ドライフードを10²位加えます。この内容で1日2回とし、このまま数日続けて行きます。

〔引き継ぎがある場合〕

しかし、仔犬がここへ来るまでの引き継ぎがある場合、その内容に従って下さい。

★くれぐれも、ここに示した食餌量を確認してから与えて下さい。

★柴犬の場合、メーカーが示す分量では、おおよそ2倍から3倍以上に相当します。

〔啼き癖の始まり〕

出来ることなら、決まった時間に餌を与えない方がいい結果が出ております。

つまり、食餌時間をいつも同じに決めていると、やがてその犬は時間になれば要求し「啼く」犬になります。



〔間食は与えない〕

繰り返しますが、健康状態が良ければ食欲は大変旺盛な仔犬です。

しかし、決して間食を与えないように、家族で良く確認しておきます。

〔食後の遊び〕

食餌が終わったら、およそ10分位は遊びます。

（慣れて来ると、この時に排便をします。）

その遊びにも、既に、飼い主との駆け引きが始まっています。

普段から、どんな行動をするのかを良く観察します。

〔初めての夜〕

仔犬の成長過程によっては、最初の夜から2～3日は多少啼くかも知れませんが、排尿便以外は「無視する」事が大切になります。

仔犬は、落ちつき始めると直ぐに飼い主との駆け引きを始め、「啼けば相手をしてくれる…」と「啼き癖」に繋がります。

※ポイント

仔犬の飼育で失敗する第1位は、食餌の量を与え過ぎる、と言う事です。

しかも濃厚（脂肪の多めな肉類など）な内容は、そのまま下痢につながっています。

どんなに食べっぷりが良くても、仔犬に与える最初の食餌量は、前記に示した「粗食」が安全です。



(3) 2日目からの1週間

①最初の躰けの始まり

〔翌日の朝〕

翌日の朝、起きて仔犬が啼いても直ぐにケージから仔犬を出さないで下さい。
ケージの扉をゆっくり開けながら仔犬の胸に手を当てて、
「マテ」「マテ」と2～3度はっきりした声をかけ、
一呼吸おいてから、ゆっくり出して下さい。



〔排便〕

排尿便を良く観察する。
これから毎日、こうした排泄物を観察し犬の健康状態の信号を理解して下さい。
因みに、安心出来る健康な便は形のしっかりした状態です。

〔躰けと遊び〕

これから先も、躰けの基本は遊びの延長にあります。
そして、何か少しでも出来たら大げさに褒めてやります。
飼い主も仔犬も楽しく遊びながら、目的に沿って躰けに挑戦して下さい。



従って、これより以降の躰けについては、思ったように出来なくても3～4回で止めて、しつこく繰り返さないで下さい。
また、感情的になって大声で怒ったりしないで下さい。
これは犬がオトナになっても、同じ接し方になります。
これは犬の一生を通して、家族との関係を築くとても大切な事の一つなのです。

数日もすればマテ！が出来る様になる

※ポイント

遊びに時間を掛け過ぎないように注意し、仔犬は“もう少し遊びたい”という状態でケージに入れる事です。



仔犬はケージの中から、
飼い主や家族がどんなリズムで暮らすのか？
いま何をしているか？等と、音や臭いなどを感じ取りながら
観察し、既に一生懸命家族の一員になろうとの、
学習を始めているのです。



②仔犬との触れ合い 〔不安時の仔犬の動作〕

仔犬を外に出してみます。最初のうちは、周辺の物音など環境の変化で、
それが気になり落ちつかない状態かも知れません。

その場合は、呼んでも寄って来ないばかりか、
物陰に隠れようと辺りをキョロキョロします。
そのような不安な行動が現れたら、余り時間を
置かず早めに抱っこしてください。

〔不安な様子の仔犬は〕

仔犬が不安な態度や、恐怖状態にある場合など、
飼い主として唯一の対応の基本が、抱っこし、
次に、前記で述べた「舐め合い」になります。
抱っこしている、その間は静かに、何でもいい
から話し掛けます。
つまり、不安な気持ちを、飼い主の方へ向けさ
せる事で、
精神的な障害にならないうちに、不安な状態を
早く消し去る訳です。

逆に、不安な状態を残したままに過ぎてしま
うと、次の場面でも不安が増し、
やがてそれは苦手となり逃げ回る結果につな
がるかもしれません。



例えば、道路を散歩して、突然曲がり角から自
転車や車が現れたり、
大きな犬に威嚇されたり等々、予測のつかない
色々な場面が想像されますが、
いずれも同じく不安を打ち消すために「舐め合
い」をして下さい。

〔安心した時の仔犬〕

安全な場所で仔犬を放し、
名前を呼んだら直ぐに寄ってくる事を確認して
みて下さい。

この数日間の仔犬と飼い主の関係が、うまく成
立し
合図をすれば直ぐに寄って来るようなら、こ
こまでは合格です。



〔首輪・引き綱〕

各家庭環境によっては、この、首輪や引き綱の練習は決して急ぐ必要はありません。遅くなくても何の問題もありません。

出来ることなら無い方がいいのですから。

しかし、条件によっては、一日も早く首輪や引き綱を付けたい場合があります。その方法も色々ありますが、以下は参考程度に理解して下さい。

(a) 首輪だけ付けて10～15分位遊び、そして外します。

その繰り返しを、2～3日続け、次第に首輪を付ける時間を長くします。

(b) 仔犬が余りにしなくなった首輪に、1m位の紐を付けて自由に遊ばせます。これも、前記(a)のように短時間から始めて徐々に長くし2～3日で慣れさせます。

(c) その紐を飼い主が持って、名前を呼びながら仔犬より先になって進みます。

この様な方法を利用・応用すると早く慣れてくれます。

※ポイント

抱っこしても離れたがったら直ちに解き放す事です。

抱っこは無理に、決してしつこくしない事がこれからの躰けにあたって、犬と飼い主との関係を左右します。

その意味でこうした接し方について、家族全員の理解と協力が必要なのです。

仔犬が今の環境に慣れたか？飼い主としては早く知る努力＝観察をする事です。

③仔犬から信頼される飼い主に!

〔マテ・ヨシを最初に教える〕

ケージ暮らしも10日を過ぎると大分慣れて来ます。

多分、「マテ」とか「ヨシ」などが少し出来るかも知れません。

外に出た(前項)ことも楽しいと理解出来れば、首輪や引き綱を付ける事も喜びます。



〔良く話しかける〕

仔犬にとって大切なのは、一定の信頼関係を基礎に、

それぞれの家庭の一員として個性的で生き生きした犬に育つ事です。

その為の第一歩が、日常的にケージの中の仔犬に良く話し掛ける事

であり、また、不定期に出して遊ぶ時や抱っここの時も同様にする事です。

〔犬との信頼関係〕

この会話は、当初は一方的なので仔犬にとっては当然意味不明となります。

しかし、これが半年・1年と続くうちに、飼い主の色々な状態を犬が“察知”してくれる様になります。

実は、この察知すると言う事が、他の犬とこの柴犬を比較した場合に、特に優れた能力を発揮する点の一つと考えられます。

※ポイント

面白いからと言って、紐や布を引っ張りっこして、闘争心を煽ってはいけません。

④検便・駆虫・ワクチン

仔犬が落ちついてから、近くの獣医さんで「検便（寄生虫などの検査）」を受けて下さい。

但し、仔犬を受け取った時の「引き継ぎ事項」があれば、それにより獣医師の指示を受け、検便・ワクチン接種などの処置をしてもらいます。（後記7．お願い参照）

★引き継ぎ事項の内容によっては、仔犬が既に寄生虫駆除などの目的で薬物の投与を受けている場合もあります。抵抗力がまだ不十分な仔犬に、不用意に連続した状態で再び薬品を与える事がないよう配慮する必要があります。



(4) 自治体への届け出

生後3ヵ月を過ぎた犬は、住所地（自治体）の窓口へ犬の飼育を届ける事が義務化されています。狂犬病の予防接種を受けて、畜犬登録を

済ませ鑑札を受取ります。
畜犬登録はその犬の一生に一度、狂犬病予防接種は毎年1回受ける事になっております。

日常の健康チェック（単純な目安として参考として下さい。）

項目	健康状態は良好です	早めに対策が必要
食欲	勢い良く食べる	急に食べなくなった
排便	しっかりと形があること	軟便・下痢便・悪臭がある
眼	眼の周辺がスッキリして輝く	メヤニが付く
毛質	洗わなくても綺麗でべとつかない	べとつく・脱毛・かゆがる

(5) お願い ———— 引き継ぎ事項として

①本犬の「虫下しと、ワクチン」についての引き継ぎは・・・

★検便の予定は？月？日頃、ワクチン接種の事と一緒に近くの獣医さんに相談して下さい。（この日程を、余り変えないで下さい）

②縄文柴犬研究センターへの入会手続きは済んでおりますか？

柴犬についての様々な情報が、会誌『Jomon Shiba』から得られます。

★入会金1,000円・年会費5,000円です。
(支部によっては、この他に支部会費が1,000～2,000円位かかります)

★里親になった方は、入会手続きとは別に、「誓約書」及び「アンケート」の提出が必要です。

③時々、写真を送って下さい。

仔犬の成長度合いを写真に撮って、説明を書き添え「表記事務局」へ送って下さい。

④家族内で良く話し合い、責任を持つこと！

犬の心身の成長は大変に早いので、家族の皆さんで良く話し合って一致した接し方をする事が大切です。

世話をする側が、その時々気まぐれで接すると、次第にわがままになる場合が多く、扱い方にも難しいところが現れます。

どうか、この犬をご家族の一員に加えて末永くよろしくお付き合い下さい。

もどる

◇ 2.縄文柴犬の食餌 ◇

主な項目 (1)食事とその考え方

(3)その他の注意点

(2)手作りメニューの例

(4)ドッグフードの信頼度(参考)

(1)食餌とその考え方

〔はじめに〕

柴犬の肥満や食べすぎは良くない、と折にふれて言われるのは何故でしょう。その最大の理由は、健康な体質になるかどうか、食べ物により左右されるという私たちの長年の経験があるからです。

この問題は、人間の食文化と共通したような意味で理解する必要があると考えられます。特に、それぞれの家庭で食べ物が違い、それぞれに個性がある様に、犬の分野でも全国一律の同じ食べ物が理想的だとするのは問題があると考えています。そうした意味で、ここでは犬の食餌について考えてみましょう。

〔環境や条件の違い〕

ここで述べるのは、あくまでも一つの参考として紹介するものです。画一的に皆さんが同じで良いと言うものではありません。季節や地域差や高度差など----飼育条件や環境の違いによっても差異が出るのは当然なのです。年間を通して関東地区と東北北部での食餌の内容には随分と違いが出ますし、これは当然の結果なのです。

〔一日二食を基本にする〕

生後60日令以降の仔犬から、6カ月以上の若犬や成犬でも一日二食を基本にします。例えば、幼犬の時に3食~4食与え若犬になったから2食にする、というのは心の問題を無視し、不必要なストレ



スを与え「無駄吠き」の原因や「わがまま」な性質を増長する要因にもなります。その意味で、オトナになった犬(2才以上)には時々意識的に1日1食にして、与えなかったというストレスと一緒に良く遊ぶ方法で解消をはかるといい結果を生みます。

〔食餌の量について〕

良く量的な説明を求められますが、これは一概に述べられません。

その理由は、成長段階にある仔犬期の生後日数の違いや活動量、そして、季節やその時の健康状態・妊娠とか出産等々・・・、その時々 conditions によって工夫しなければならないからです。

書物などで言う「定量」を、機械的に与えても上手く行きません。

人間の子供たちの様子を考えると、激しく遊んだ時は良く食べるし

楽しい悲しい等も影響があります。

また、幼犬～若犬時代の食欲と、2才3才以上の食欲とは内容も意味も違ってきます。

各銘柄のドッグフードには、餌の量の目安が書かれております。

しかし、我々の柴犬には、メーカーが示す餌の量は全く適用

出来ないの注意が必要です。

基本は、全体として腹八分の量を基準にして与えます。

この量ですと、与えた食餌を3～5分位で綺麗に食べ終わりますが、

それがやや多いと食べるのに時間が掛かり、更に多いと

食べる事に集中しなくなりやがて残すようになります。

参考＝大雑把な食事量の判断として、人と犬の体重差を目安にする。

詳細は後述



② 手作りメニューの例

〔手作りメニューの要点として ----- その食餌内容〕

- ① 米（ごはん）
- ② ドライのドッグフード
- ③ 調理食（原則として加熱する）
 - ・野菜（ネギ類を除く）
 - ・蛋白質を豊富に含む食品
（小魚類・レバー・肉片など）
 - ・良質の水（後述）
などを加えたものです。

※尚、次項で「その他の注意点」を述べましたので参考にしてください。また、増量の目安をグラフにしましたので合わせて参考にしてください。

1日分の目安は-----（参考）

【離乳期 -> 幼犬期】

成長の早い時期なので、増量には充分注意して下さい。

（増量の目安は、半月で10%程度）

- ① ごはん大さじ2 ≒50グラム≒70カロリー
- ② 煮干しの粉など ≒10グラム≒20カロリー
- ③ 幼犬用フード ≒20グラム≒70カロリー
（最初は柔らかくふやかした物を与える）

その他（調理食）

【若犬期から】

- ① ごはん（茶碗1杯）
=150グラム≒200カロリー
- ② ドライフード
=100グラム≒300~400カロリー
- ③ 煮干しなど
=20~30グラム≒50~70カロリー
- ④ 調理食（野菜などを含む）
=150グラム≒200カロリー



(3) その他の注意点

〔良質の水について〕

良質な水を与えるという事は、良い食餌と同じか場合によってはそれ以上に大切な分野です。特に、水道水は直接与えるのではなく、必ず一度は煮沸し木炭などを投入し、添加物などを除去して、冷ましてから与えて下さい。

水道水に含まれる化学物質と、食品に含まれる化学物質の関係は未知の分野ですが、最近体内での化学反応の影響についての問題が徐々に表面化しつつあります。例えば腸内微生物の減少による自然治癒力の減退などが挙げられます。そうした中で、「良質な水」についての知識や配慮は、いまや食物以上に重要な分野となりました。

〔食餌は機械的にしない〕

食餌は機械的に与えるのではなく、例えば、交配中の種犬や成長期にある犬たち、妊娠や出産・授乳期の犬たちなどと、具体的に個体別の管理が求められます。その意味で、相当きめ細かな調整が必要なのです。犬が安定した状態なら、少なくしたりやや多くしたりと量の変化があっても良く、成犬になれば月に1～2度位、意識的に一食抜くなど・・・、時には思い切った接し方も必要です。肝心なのは、単純に食餌を与えるというシステムではなく、こうした手作りメニューの過程を通して犬との絆を深めるという側面がある事です。

〔特別な食物として〕

更に、普段から咀嚼筋が充分に働かせる食物として牛骨を与えたいものです。これは、年間を通して「齧れる」条件を与える様に心掛けるためです。



この事は、犬の能力を発揮させるだけでなく、ストレスを和らげる効果、その他も期待出来るからです。

〔食べさせないもの〕

犬たちに与えてはいけない物として、ネギ類は絶対に避けます。理由は溶血性貧血を起こすからだと言われております。また、鶏の骨は胃腸に傷を付けるおそれがあると言われております。その他、砂糖を含む食物、濃厚な味付けの物、或いは不必要な化学物質・薬物等を如何にして与えないようにするか、などの配慮をします。また、牛乳を与えると下痢をひきおこす事も良くありますので、避けた方が良いでしょう。（授乳中の仔犬には、必要性に応じて“犬用ミルク”を与えることは有効です。）

〔食物と同じに太陽も----〕

いくら素晴らしい食餌を工夫したとしても、それらを総合的に吸収し分解するための一般的な前提には、日常、太陽光線（日光浴）に触れる事が最大の御馳走であり、この事はどうしても避けて通れません。

〔食餌の与え方〕

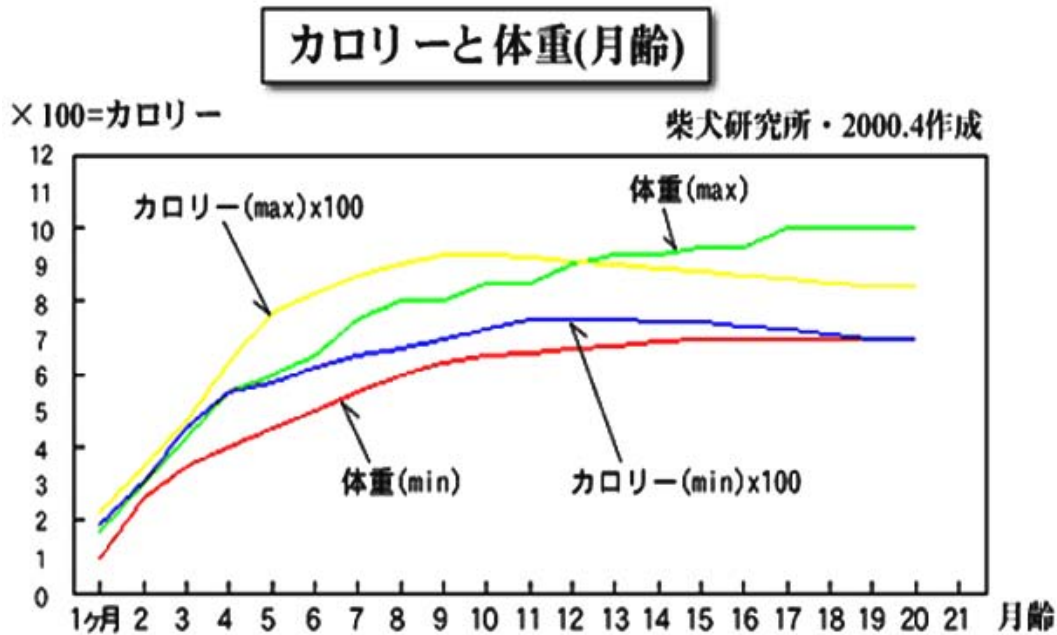
食器はオトナになっても利用できる大きさ（直径12～15cm・深さ10～12cm）を選び、材質（ステンレス製）が安全）や、与える場所を工夫して下さい。
 初期（仔犬期）のケージ暮らしでは、その中で与えます。

良く「犬の飼い方」等を述べた書物では、決められた時間に与えるとあります。
 私たちの柴犬の場合には、出来ることなら与える時間は変化させます。

変化があった方が、犬の一生にとっての食餌に対するストレスは少ないと言う結果があります。
 以下、詳細を省略しますが、その他にもこうした方法で好成績が期待でき、悪い結果は出ていません。

しつけの分野と重複しますが、間食は絶対に与えてはいけません。
 特に、子供さんなどが口に入っている物を、可愛いと言って与えるのは最悪です。

《注記》 ここに示したグラフとカロリー表は、年間を通しての一つの目安です。季節や出産・子育て中など様々な実情によって違いがあります。



これまでの内容を示した一例として		別項・その他について
離乳食=270Kcal ご飯50グラム =70Kcal 煮干し10グラム =20Kcal 幼犬用フード =70Kcal その他 =70Kcal～	若犬用=750～870Kcal ご飯150グラム =200Kcal ドライフード 100グラム =300～400Kcal 煮干し20グラム=50～70Kcal その他150グラム =200Kcal	野菜・魚・レバー・卵・肉などを適当に柔らかく煮る。 (分量の目安は人との体重比を参考に決める)

(4)ドッグフードの信頼度(参考)

私達は、前記で具体的な内容を示した様に、加工食品のドッグフードは20～40%の範囲でしか使用していません。その訳は大体次の通りです。

〔ドッグフードのはじまり〕

かって(1950頃)は犬や猫の餌と言えば各家庭での食事の残り物でした。ところが、昭和38(1963)年、日本最初のドッグフード・メーカーが設立され、その頃からでしょうか、一気に犬たちの“食生活”?が変わる契機となりました。

その後、昭和40(1965)年代に入ると外資系メーカーも加わって、それまでの「残り物」と言う常識が消えて行きます。

〔ドッグフードの一般論〕

加工食品なので栄養バランスは最も優れている、と考えますがそれは「思い込み」だと思います。

私たちが各地で取り組んだ結果(1987～2003)や情報によれば、様々な欠点の出た原因の一つにはこうした加工食品も挙げられると考えています。そうは言っても、全く全てが悪いと言ってるのではなく、長所を生かす工夫も必要です。

詳細は別項にゆずりますが、ここでは以下の事実を確認して下さい。

〔ドッグフードの内容----〕

ペットフード業界で作る公正取引協議会は、栄養分の統一表示基準を1993年4月頃から決めました。

その統一基準は、ドッグフード・キャットフードについて、粗タンパク質、カルシウム、リン、塩化ナトリウム、ビタミンなど栄養分含有量の下限を設定しました。

この基準をもとに言わば「総合栄養食」として犬や猫の主食と間食の区別と共に、賞味期限の明記とかも義務化するようになり、添加物などもわかりやすく付記することになりました。しかし、これは取り決めであって、必ずしもこの通りではありません。

これはあくまでも業界での自主規制であって、違反したとしても分かりにくいし何の罰則や取



締りも出来ないし義務も無いというのが現状です。こうした動きを裏付けるのかも知れませんが、民間で発行される雑誌やその他などでも、「ペットフード」の問題点が論じられるようになって来ました。

しかし、もう一方で、その多くは安全だとする宣伝が主流です。

〔安全基準は作れるだろうか?〕

一方、日本獣医師会ペットフード委員会の宮田勝重獣医師は、犬や猫の「健康と言う意味では、添加物の表示が不可欠(1993.3/10読売)

」とか、日本獣医畜産大名誉教授(獣医内科学)の本好茂一氏は「表示は公平・公正さが第一。信頼出来る表示基準を作ると同時に、それを業界全体に徹底するよう望みたい」と指摘(1998.4.5 読売)しています。

また原材料や中身の安全性をチェックする公的機関の設置を急ぐべきだ(岡山・春名章宏獣医師)と訴えていました(1993)。

1998年6月になって本好茂一氏(前記)が発起人で、ようやく「日本ペット栄養学会」が発足した、と言うのが現状なのです。

もどる

◇ 3. 縄文柴犬と暮らす ◇ (人間社会の学習)

主な項目	(1)引き綱でのしつけ・遊び	(4)ケージ暮らしを終える頃
	(2)帰巢行動(回帰行動)	(5)人も犬も群れて暮らす
	(3)犬と人間社会との関わり	

(1)引き綱でのしつけ・遊び

出来る事なら、引き綱や首輪などが無い柴犬との共存こそ、本来なら理想的な暮らし方になる筈です。

犬達とは、歴史上、引き綱や首輪の無い関係が長期間続いていました。

しかし、今日では法律によって、係留する事が義務化されております。従って、好むと好まざるとに関わらず、引き綱や首輪の問題に取り組み、逆に、楽しめるようにしたいと願っています。

最初は、首輪や引き綱に慣れることから始めますので、直ぐに散歩するという事にはなりません。決して急ぐ必要はありません。

①生後約3カ月以上になれば、最初は首輪を付ける練習をします。首輪を付けられた仔犬は、最初、大変不機嫌となり暴れたりしますが、4～5分もしますと少しだけ慣れます。

この4～5分の間、仔犬が首輪を気にしなくて済む位に名前を呼んだりして楽しく遊びます。最初は10～15分位で取り外します。

ここでは、首輪が付いたら楽しく遊べる、と言う関係を保ち、嫌なイメージにならない様に工夫して下さい。

2日目は、前日より少し長く遊びます。そうして徐々に時間を長くします。この状態が1週間も続けば、仔犬は首輪をそれほど気にしなくなります。

(尚、作出の関係で、母犬と一緒にいる間に、首輪や引き綱に慣らす方法について、次の項で触れます。)

②首輪に慣れたら、今度は、引き綱を付けます。



最初に引き綱を付けたら、

仔犬は自由が効かないので激しく抵抗したりしますので、引き綱を付けた状態を、仔犬に感じさせない様な工夫が必要です。

そして、勝手に進もうとしたら、一寸だけ引き綱を張って直ぐに仔犬の名前を呼びます。

これまでの学習で、名前を呼べば必ず仔犬が戻って来る筈です。その時に、素早く引き綱を緩まないように手繰り寄せる事です。

つまり、仔犬に引き綱を意識させる最初です。この関係は、一種のゲーム感覚で仔犬が何かに夢中になろうとする、その場面を利用しての遊びなのです。

こうした繰り返しも、しつこくしないで、楽しみが残っている段階でその日は止めます。1週間ほど様々な場面で引き綱を意識させ、慣れさせます。

③犬のペースで歩かない

いよいよ散歩の始まりです。引き綱を付けて外に出たら、飼い主は決して犬の後に付いて（意思に合わせて）歩かないことです。

飼い主のペースで行動する、と言うのがここでの基本的な考え方です。

仔犬は外に出ると、常に、勝手に行動しようとするでしょう。それを引き綱で制止するわけですから、場合によっては抵抗するのが道理です。

しかし、それでも飼い主の意思に強制的に添わせるために引き綱を用います。

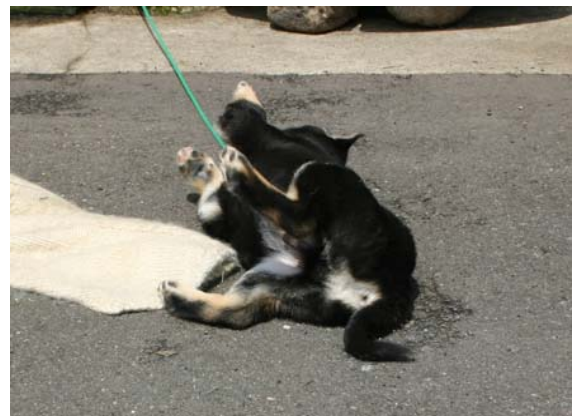
④必ずアクシデントがある。

始めから何事も無く、犬との散歩が自由に出来るとは何方も思って居ない筈です。

初日に上手く行かなくても慌てない事です。基本は、首輪や引き綱に慣らす事の延長線上にあります。

つまり、犬を強制的に制御する訳ですが、その学習方法は、特に、初期の段階（生後5カ月位）では遊びの延長線上に置きます。

人間でも、未経験の事は色々な不安が一杯です。引き綱を付けて、一緒に行動するという事では、今までに感じなかった色々な場面に遭遇します。



その事を、仔犬の立場で考えて、思いやりを込めて優しく接して下さい。

⑤これまでのしつけの復習の場となる。

私たちの柴犬は、想像する以上にとても敏感であり、大変に優れた感覚機能を持ち合わせています。

その意味で、驚いた場面は「1. 縄文柴 仔犬の飼い方」(2)仔犬との出会い」で説明した様に、ここでは、そうした諸々のしつけの言わば復習の場ともなり、それが上手に行くように確認しながら、更に発展させるような関係です。

⑥時々、犬と一緒に「マテ」で立ち止まる。

色々な場面で、「マテ」が出来るように、繰り返し繰り返し教えます。

オトナになった犬が、飼い主が立ち止まるとの知人との話し中とか、他の犬が現れた場合など、様々な場面で忍耐強く落ちついて対応してくれるようになります。

⑦高度な関係・引き綱の扱い

こうして、6カ月以上になりますと、徐々に散歩中の言葉は不必要となります。

2年3年と過ぎて行くと、引き綱の持ち方とか張り具合などにより、様々な意思の疎通が図れるようになります。

こうして、日常の信頼関係も段々と高度になり、それぞれの飼育目的に沿った工夫が行われます。



(2) 帰巢行動 (回帰行動)

この帰巢行動という解釈について、生物学的な説明は別項にしますが、ここでは「何かに夢中となって、飼い主と一旦は離れてしまうが、必ず元の場所へ戻って来る」という事を意味します。この分野で典型的なのは狩猟犬です。

冒頭にも述べた様に、この柴犬たちは縄文時代から狩猟犬としての歴史に、言い尽くせない程、優れたものがあります。

その中で、「元に戻る」と言う行動自体は比較的単純な事ですが、この内容には大変難しい解釈が含まれている事をご理解下さい。

例えば、私たちが知らない土地で迷子になったとしたらどう行動するか？と考えると、その複雑さが多少はご理解いただけるのではないのでしょうか。

①引き綱を付けて屋外への散歩などをし、途中の安全な場所で犬を放して遊びます。(誰もいない山野・河川敷・海岸・冬の田んぼや畑など) 犬は大喜びで、興奮して駆け回ります。

こうした行動が現れるのは、恐らく6カ月前後になってからです。

3カ月前後の場合は、何かに夢中になってどんどん離れてしまう事があります。犬が夢中になって離れ出した頃、飼い主は思い切って物陰に「隠れ」て犬の様子を見ます。

②犬は目・耳・鼻を使い、飼い主を捜し出せるのでしょうか。

この遊びは、仔犬の成長度合いにより、条件を変えて行います。

いずれの場合も、犬が飼い主を発見し寄って来たら、思い切り褒めてやります。

こうした遊びを日常的に組み入れる事で、不測の事態などの時に犬がパニックに陥って、正常な判断が出来ない状態になる事を防ぐ訳です。

そうならない事前の対処として、色々な場面を想定して工夫します。

特に、都会で暮らす犬の場合、周辺の環境が複雑な分、難しい事が沢山あります。

家族全員で犬の身になって、もし、犬が迷子になったらどうするか、を検討しておきましょう。



(3) 犬と人間社会との関わり

犬のしつけの大半は、人間社会で共に暮らせるための学習です。従って、ここに書いていない事も、飼育目的によっては色々と必要になります。

①車に乗せる

日常の暮らしで家族と慣れた段階で、犬を車に乗せます。

仔犬のこれまでの成長過程では、既に車に乗った経験があるかも知れません。しかし、車に乗った経験が無い場合、日曜日に家族全員で野山へ行く時に、犬が怖がって緊張状態になり場合によっては“車酔い”になるのでは可哀相です。

そうならない為には、仔犬のうちから車に慣らす必要があります。

最初は、エンジンを掛けていない車に乗り、慣れた所で抱っこしたままエンジンを掛けて様子を見ます。緊張しそうな時には、常に話し掛けて飼い主の方へ気持ちを向けます。



②人込みの中へ行く

犬の目線で人を見る場合、遠くなら視野に入りますが、近くなると人の足元しか見えない筈です。従って、人込みの中へ入るのは沢山の靴音が聞こえ足元しか見えない状況なので、大変不安な状態になるよう です。

こうした意味も含まれている為、引き綱を付けて散歩する時は、犬が先頭で飼い主がついて行く、という様にならないことが大切なのです。つまり、必ず飼い主の足元があり僅かに伝わってくる引き綱の感触が、安心を保ってくれます。

人込みの中で、犬が逃げだそうとしたり、座り込んで動こうとしなかったりするの、いずれも怖いとか不安とかの気持ちからなのです。

その場合には、何度か説明した様に、抱き上げての「舐め合い」が必要です。そして、落ちついたら下ろして名前を呼びながら、再び歩かせてみます。

こうした繰り返しは、根気良く努力する事が必要なので、最初から上手く行かないからといって諦めないで続けて下さい。



③階段の登り下り

前項とは逆に、犬の目線で言うやや高い所はどうでしょうか。

人の場合も、高い所は苦手な場合があります。仔犬の高い所に対する恐怖を取り去って行くと言う、飼い主との精神的な関係が重要となります。階段の上で家族の誰かの協力によって仔犬の名前を呼んでもらい、仔犬が落下しても受け止められるように下から手を添えて構え、2～3回登らせます。その都度、一段でも登ったらオーバーに褒めます。

こうした経験を何度か繰り返すうちに、意外と簡単に、仔犬は「登り」を覚えてくれます。

ところが、下りるときはもう少し難しい様です。恐らく、高さを感じるからでしょう。

下りる時の最初は、3～4段目からにします。つまり、飛び下りたのでは意味がないので、一段づつ下りればいいのです。一段でも下りる事が出来たら、抱っこし大げさに褒め舐め合います。そして、5～6段目にし、仔犬の名前を呼びながら様子を見ます。

恐らく仔犬の気持ちには、下りようかどうかという迷いがあるのでしょう。飼い主が、側で励まし助けられる関係にあれば、仔犬は決心して行動します。そして、階段を下りることが少しでも出来たら直ぐに褒めてあげます。

仔犬の時期に、飼い主からこうした行動の決断をする時に援助されれば、それは学習されています。何かの事情で似たような状況の時に、飼い主の判断に従おうとする傾向が強くなる筈です。

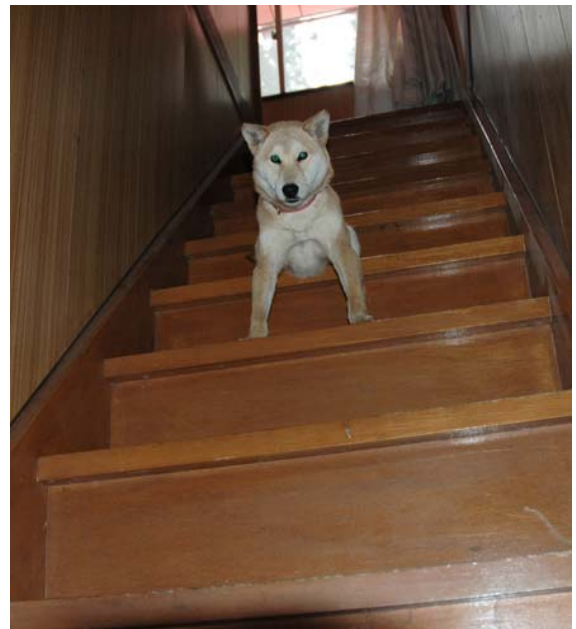
④自動車の怖さを教える（交通事故を予防する）交通事故の問題は、どんな環境でも、避けて通れません。その為には、どうしても「自動車」の怖さを犬にしっかりと教える必要があります。

ここでは、2つの方法を説明します。

車の往来が激しい道路での車の騒音や風圧などを、出来るだけ近くへ行き感じさせます。

もう一つは、家族に手伝ってもらい、犬の側で車の急発進とか、急停止などをして恐怖を感じさせます。

ここでは、しっかりと「車の怖さ」を学習させなければなりません。こうした体験は、犬が迷子になったとしても、交通事故に遇わないで済む、と言う行動につながる筈です。



(4)ケージ暮らしを終える頃

①反抗期に触れて

生後、6カ月を前後したあたりから、名前を呼ばれた事が判っているのに知らんぷりする様な態度を見せる事があります。所謂、反抗期です。

今まで素直にしていた「マテ」も、時々、怠けたり聞かなかったふりをします。

仔犬は成長し、自分である程度判断する力が付き、少し頼もしい雰囲気を感じさせるようになって来た訳です。

しかし、このまま放っておくのは良い結果を生みません。だからと言って、怒ってみても解決しないばかりか、却って反抗心を増長させる結果にもなりかねません。

問題は、どのようにしてこの抵抗心を転化させ、これまでよりも一層飼い主との信頼関係を深めさせるか、と言うことです。

通常、殆どの犬たちはこの段階のポイントで、初期のしつけが終わっていますが、更に人と犬との楽しい共生関係を築くためには、一回り成長した段階として人間社会を教えなければなりません。

②柴犬たちの能力については、まだ誰もが語り尽くす事ができません。

綱渡りや木登りに喜んで挑戦した縄文柴犬や、当然の様に、優れた察知能力を発揮して狩猟に活躍した沢山の柴犬たち・・・。

飼い主の指示を、これまで良く聞き分けていた犬が、何故かその言葉を知っていても無視するようになった理由は、その犬が他にもっと別な興味が感じられたからに違いない、と考えてみます。



ここでは、言うことを聞かないからと、腹を立てる事のないようにしましょう。

つまり、犬は興味の対象が広がりつつあると考えると、その欲求内容には探索や狩猟があるかも知れないし、木登りとか綱渡りかも知れま

せん。

そうした柴犬たちの能力を開花させるためには、家庭内で日常的に飼い主が、どれだけ深く密接に柴犬と接するか、と言う事が大切になります。



(5)人も犬も群れで暮らす

①何故叱るのか？

ここまで、柴犬の育て方の中では「叱る」と言う接し方について述べませんでした。従来の所謂「しつけ」においては、犬との関係で何か不都合が生じた場合、叱る・怒る・叩くと言う事が見られました。

問題は、どんな場合が飼い主にとって不都合なのか、という理解の内容です。

例えば、玄関先に柴犬が繋がれていて、知らない間に大切な革靴を齧られたので、叩いて懲らしめた。この場合、予め靴や齧られたら都合の悪いものは、犬の周辺に無ければ叩かなくて済みます。

こうして考えると、殆どの「不都合」は事前に飼い主が予測しておけば叱る必要が無い訳です。犬と一緒に生活している場合、どうしても人の都合が優先されるので弱い立場の犬に、しわ寄せが行きます。

体罰で良く言われるのが、問題行動に対して20秒以内なら効果がある。或いは、怒る時のけ

じめとして、新聞紙を丸めて「お尻」とか「鼻（鼻鏡）」を思い切り叩く、などを奨励する場合があります。しかし、犬と飼い主との条件・関係などを考えると、「これがいい」とは一概には言えないでしょう。

例えば、一般論として犬に「体罰」を加えた場合、その後の行動には様々な変化を観察する事が出来ます。その一つは、犬は威圧感を覚えた結果としての障害が残り、もう一つの傾向は反射的に避けたり抵抗したりする、などの行動が顕著になります。

叱る場合に当てはまるかどうかの問題はありますが、群れで暮らす動物であるならば、仲間外れにされた時に、集団の中に入りたい欲望がかき立てられます。そんな気持ちを考えると、不都合が生じた場合に群れのリーダーがその犬を「無視」する事が、怒る場合より意味があると考えられます。

この問題は、それぞれにもう少し具体的に研究を積み重ねる必要があります。



②犬が飛びついて来るのは何故か？

この場合は、最初から犬の目線（目の高さ）で接すれば、飛びついて来ません。人間同志親しい間柄になれば、顔を近づけて話したくなるというような意味で、仔犬も似たような心境だと考えられます。

これらに関連して、犬社会では良く挨拶する行為として「舐め合う」とか「耳を倒して」「姿勢を低く」などの条件に「尾を振る（ゆっくり）（激しく）」と「視線」等を組み合わせた行動により、上位の関係や劣位の関係として接しています。

まだ母乳を飲んでいる頃に、母犬から教えられた学習の結果としてこうした行動が成長後も守られています。と、同時に、これは犬社会の一つの秩序を維持していると考えられます。

③野山へ行こう

休日を利用して、家族で誰も居ない野山へ行って、犬と思いっきり遊んでみましょう。1時間・2時間・3時間と犬が好き勝手に、野山を駆けめぐるとどうなるでしょう。そんな観察も、これまで知らなかった姿や動作を見せてくれて面白い筈です。

縄文柴犬は、普段どんなに家庭で楽しく暮らしていても、野山の魅力にはとてもかないません。野山で駆け回る姿を見たとき、柴犬の野性味や壮大なロマンも感じさせてくれます。これから先の時代、恐らくは自然も相当人工的に管理される環境になると思われます。

都会で暮らし、犬たちが思い切り走れる場所も無い現状に於いて、未来には人も柴犬たちにも、益々厳しい環境が待ち受けています。そうした時代の環境や条件の変化に対応するため、犬のしつけの工夫にも変化が必要です。

大昔から受け継がれた日本犬の特徴について、残念ながらまだ知られていない事が多く残されており、これからその研究を急がねば、必要な野山が無くなってしまいそうだ、と、追い立てられるような気持ちになります。

④雄と雌について

オトナになった柴犬たちの行動に、明らかな



違いを現すのがなわばり意識です。特に雄は、その意識が徐々に成長し交尾経験を境にして、一段と目立つ誇示行動が現れます。そして、その雄が自由に回遊したとしたならば、おおよそ半径2～3kmが行動圏で、臭いをかきながら探索し情報を収集し、自分の臭いを残し回ります。

一方、雌の場合、特に出産経験をした場合には、その巣となった所を中心にし仲間や家族やグループ意識が強くなります。場合によっては、ボス的な存在の雄でさえ寄せつけない程、集団を統率したり維持する意識はむしろ雄よりも強く感じられる雌も居ります。当然の事ながら、出産直後の1週間は父犬さえ寄せつけずに母犬は子育てに集中します。

しかし、仔犬が目を開ける頃、父犬が徐々に仔犬に近づくのを母犬は受け入れて、その仔犬の教育に参加させ、離乳する生後40日頃には、むしろ父犬が中心になって犬社会に参加するための教育に、その見事な能力を発揮するようになります。

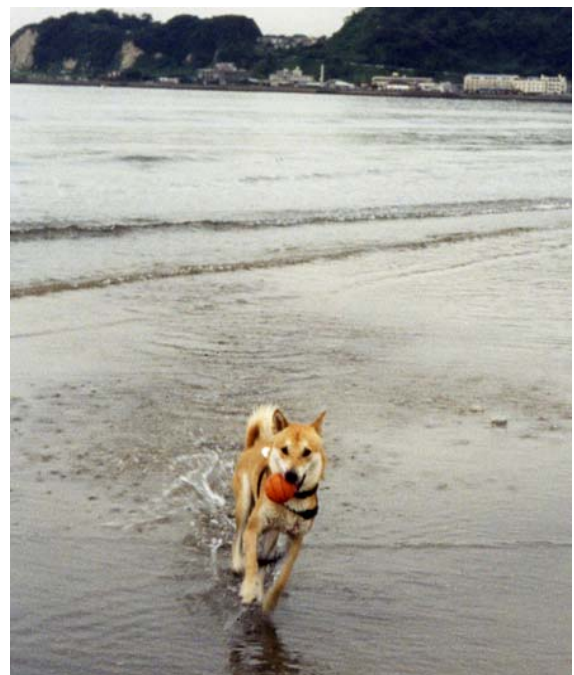
縄文柴犬のことを、より深く知る為には、こうした子育ての観察が欠かせません。その観察の結果には、これまでに述べた仔犬の育て方に繋がって来ますが、まだまだ判らない事が多く残されております。今後、皆様がこうした観察や研究にも是非ご参加下さることを願っております。

⑤これからの人と犬の関係

これからの高齢化社会と言われる時代は、福祉社会などとも表現される一方で、動物との関わりが注目され始めました。これまで法律としてのペット動物は、単なる「物」でしかありませんでした。しかし現状では、飼い主の心を「癒す」という役割も担いつつあるようです。例えば、一人暮らしの老人世帯では、犬は生き甲斐であり心の支えとなり無くてはならない関係も生まれつつあります。

この様に犬は法律で言う、単なる物品では無いという現実によって、今後は益々この分野の見直しがされるものと思われます。

もどる



◇ 4. 繁殖について ◇ (研究し保存を目的として)

主な項目	はじめに	(1) 交配まで	(3) 仔犬の管理
		(2) 出産	(4) 離乳・旅立ち

皆様からの要望により、過去に「柴犬研究所」として連載(1996年・柴犬研究会誌36~46号)の内容を一部修正し、再録します。-筆者・五味靖嘉

はじめに ウチのコも素晴らしい母・父犬に!

”犬は安産の神様”とは昔からの言い伝えですね。出産から育児を体験すると、その犬が生まれながらにして持っている能力の素晴らしさに改めて気付かされます。

ウチのコの縄文柴犬を誇りに思う事が出来るのです。

一番条件が良いのは、雄と雌のカップルで、仔犬期から飼育することです。しかし、殆どの方は、一頭からの飼育です。相手となる犬の選定や交配についての留意事項を守って実践することが必要になります。

愛犬に、飼い主がしてやれる事は、家の事情に応じて環境を整え(【5. 出産場所】参照)、日常の食生活(【11. 離乳食に触れて・・・】参照)などに注意してやる

程度です。日中、留守になるという条件でも、飼い主の一寸した工夫や努力があれば大丈夫です。

★生後8ヵ月過ぎの雌犬なら出産する事が出来ます。

★出産した母犬は精神的にも大変充実した状態を示します。



(1) 交配まで

【1. 雌犬の管理】

よく「雑種の仔犬が生まれてしまった」との相談があります。そうならないためには、常時繋いで飼うのではなく必ず「犬舎」を用意して下さい。犬舎の設置場所や構造などは、実績のある経験者に相談する必要があります。そして、日常的にご自分の犬の観察を怠らないようにします。(仔犬の育て方、参照)

【2. 発情の前触れ】

雌犬は性ホルモンの活性化によって、所謂、発情期を迎えます。現象としてはどことなく綺麗になり、動作が活発になるなど、普段と違った行動が現れます。いつもより排尿の回数が増えたりするのも発情の準備段階と正しいです。

柴犬の場合、これまでに確認した最も早い発情は生後170日、遅い場合は1ヵ年過ぎてからでしたが、平均的には8~10ヵ月位が目安です。この時期に大切な事は、前もって健康チェックをする事です。特に、混合ワクチン接種(年1度)とか、検便などは必ず済ませて下さい。母犬の健康状態が良ければ、より安定した仔犬の出産が期待できるからです。



【3. 発情の確認】

発情の前触れの時期からは、寝る場所に新聞紙などを敷いて置くと、「発情」と言われる「生理出血」を確認し易くなります。また、その時期になると徐々に外陰部の腫大が確認できるのです。（但し例外もあります）交配予定（排卵日）に関連し、出血開始がいつか？をメモをして、交配をお願いする相手に必ず伝えて下さい。

【4. 交配のルールについて】

善意で取り組んでいるとは言え、今日の社会情勢では様々な問題があります。その事に触れた、一般的なルールを述べて見たいと思います。

- (1). 雌の飼育者は雄の飼育者の所へ犬を連れて行く。遠隔地ならば輸送の経費を往復負担する事になります。いずれも、必ず事前に打合せをして下さい。
- (2). お互いの都合で、雄の飼育者は雌犬を何日間か預かる事もあります。食餌や健康管理、或いは経費などの諸々について、双方で必ず話し合ってください。
- (3). 交配が終わったら「交配証明書」を受け取って下さい。これを、後日、仔犬が生まれ登録する際、「血統登録申込書」に添付して下さい。（交配相手の登録犬名、交配日などの記録を記入。）また、必ず両親犬のカラー写真（縦5cm×横6cm以上）も準備し添付してください。

★以上、作出の準備と交配に関する要点を述べて見ましたが、交配が無事終わったとしても、必ず出産するとは限りません。また、出産環境の問題等々、特別に配慮を要する事は沢山あります。（次項参照）



子育て中の夫婦犬



(2) 出産

【5. 出産場所】

—— 出産予定 —— 交配が無事終わりますと、それから約60日～65日(平均63日)後が出産予定日となります。

ところが柴犬達は相変わらず活発に行動して飼い主をハラハラさせるのです。出産の約2週間前頃までは腹もあまり大きくなりず、「これで子供が出来たのか?」と疑いたくなることも良くあります。母犬が落ち着ける出産場所を早めに確保してやるのが、この時期とても大切になります。他人や他犬が中をのぞいたり、しょっちゅう人の出入りがあるような産室は避け、できるだけ安心できる場所を確保してください。

— 出産場所 — 犬舎の中には、面積にすると最小50㍍×60㍍位の薄暗くなるような「箱」を用意し、これを寝場所として前もって習慣付けておけば、ここを出産場所として利用させることができるでしょう。

ここで注意したいのは、出産が近づいたからと言うので、箱の中に敷物を入れる場合です。季節など環境にもよります。例えば、冬季なら暖房のためにペットヒーター(床暖)などが必要になります。しかし、毛布とかタオルなどが敷いてある場合、産まれたばかりの仔犬が下敷きになる・からまったりする事故も良くあります。夏季ならば、「床板」のままの方が無難です。張り切って、新しく犬舎を作るとしても、床の隙間やペンキの塗り立てとか真新しいベニヤなど、科学的臭気も犬は嫌がり、落ち着きもなくなります。

【6. 出産当日～2・3日目】

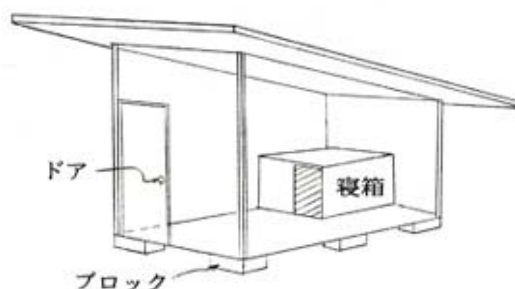
全体に大きくふくらんでいた腹が下腹部を主に下がってきます。乳房もふくらみ、いよいよ出産近しい感じになると、母犬は落ち着きなく箱の底を引っ掻いたり、うろろると歩き廻ったりします。

柴犬の場合、犬は自力で無事出産し、後の始末もキレイにします。飼い主との信頼関係がしっかり出来ている犬は、まだ濡れている仔犬を飼い主が触っても怒らない場合が多いのですが、無理にいじることは避けましょう。

仔犬が産まれて後、母犬が落ち着いていて、あまり仔犬の声が聞こえなければ、まずは無事乳にもありついているのだろう、と判断してもよさそうです。

母犬には、出産当日の食餌は与えない方が無難で

出産場所のイメージ図



す。羊膜その他を食べて始末しているからです。夏季なら綺麗な「水」を与える程度がいいでしょう。

ここで注意したいのは、出産する為の体力が必要だからと言うので食餌量を急に増やしたり、或いは、母乳が豊富になるからと言うので、濃厚なメニューにしたり、市販の栄養補助剤のような食品を与えるのは、様々な観点から考えものです。

2度目の食餌から、これまでと同じメニューを普通に与えて下さい。母犬が餌を食べている時、産まれた仔犬にちょっとだけ、最初、時間的には10～20秒位にし、2回目、3回目と徐々に「触る」ことに馴れさせるようにしましょう。仔犬は、「人の手に触れる」学習が始まりました。

仔犬の計量は、毎日記録をします。生後3日目くらいから、30～50㍍の体重が増え、発育具合が順調かどうかを知る目安となります。

後2週間で産みます。



(3) 仔犬の管理

【7. 生後2～3週間】

生まれたばかりの仔犬は、ひたすら母犬の乳房を探り、小さな体に似合わぬ大きな口で乳首にむしゃぶりつきます。目がみえず、耳も聞こえない仔犬が母犬の乳首を探り当てる事が出来ることにはおどろかされます。

母犬が落ち着ける環境にあり、母子共に健康な場合には、こうして親子の付き合いが順調に始まるわけです。ところが、親子どちらかに問題があると、こうは行きません。出産数が多かったり仔犬が未熟であったり、健康上の問題を抱えていて母乳を飲む力が弱いと、母犬は落ち着き無く動き回ったり、仔犬をなめ回したりして、何とか仔犬に刺激を与え乳を飲ませようと努力します。

何らかの理由で乳首に吸いつかない場合、仔犬の体温の低下を防ぐために、摂氏40度位の湯に体をつけてやると、2～3分で元気を取り戻す場合もあります。しかし、母犬があきらめたように、あまり世話をしなくなった仔犬は人工的に育てたとしても虚弱であったり、何らかの問題を抱えている場合が多いのです。

【6. 出産当日～2・3日目】でも触れましたが出産後、2日目からは母犬には普通の食餌を与えます。

母犬が食べている間を利用して飼い主は仔犬に触れてやり、出来る事なら体重も計るようにしましょう。様々な条件により、生まれて3～4日の間は体重の増加があまり見られない、と言う場合もありますが、その後は一日ごとに30～50%ずつ増えて行くのが普通です。

安心の目安としては、生後2週間で出産時体重の約2倍以上になっていれば、生育は順調と見て良いでしょう。初めて母親になった犬でも、自分の食餌や用便が済むとサッサと仔犬の所へ戻るのが普通です。母犬が落ち着けるような環境を整えてやる事が何よりも大切です。

生後2週間を過ぎると、そろそろ仔犬の目は光を感じるようになり、瞼が開き始めます。また、耳も同様に発育し、音に反応するようになります。四肢の力も強くなり兄弟で乳房へ吸い付く競争が活発になります。母犬の管理状況にもよりますが、生後3～4週間になったら、第1回目の寄生虫チェックの検便をする時期です。この時期は忘れずに獣医さんに相談してください。(駆虫薬は副作用の少ないものを体重に応じて与えます。)ほとんどの仔犬は胎盤感染によって回虫を持

っていると考えられます。仔犬の便は母犬が食べて始末している筈ですから、母犬にも同様に駆虫薬を与えます。

【8. 仔犬の管理】

1回目の駆虫薬を飲ませてから、翌日とか2～3日目には母犬の便とか仔犬の便から、木綿糸ほどの回虫が発見できる場合があります。(排泄物は毎日観察をし、健康状態の情報を得てください。)

寄生虫が発見できた場合、1回目の駆虫をしてから数え、2週間目には第2回目の駆虫をします。或いは、2回目の検便を受けます。

仔犬の時期の管理で、内部寄生虫の始末ができて



産まれて2日目



離乳後の間もない母犬

【バイエルがおすすめする 犬回虫・鉤虫・鞭虫駆除プログラム】	出 生 ↓ ↓	柴犬研究所のデータでは —— (過去15年による記録から)
①検便(胎盤感染による回虫・鉤虫 の有無)⇒駆虫	25日 ↓ 4週	①最初の駆虫(★駆虫の前には、検便で確認する。) ①と②の間隔は10~14が目安とする。
②ワクチン接種前の検便 ⇒ 駆虫 (生後50日頃1回目ワクチン接種)	40日 ↓ 7週	②2回目の駆虫 以降は左に同じ対処とする
③ワクチン接種前の検便 ⇒駆虫 (生後90日頃2回目ワクチン接種)	50日 ↓ 8週	[理由] 離乳期を45~50日を目標にした方が、その後の 状態に好影響を与えるようです。こうした条件 では、授乳中に「初期の駆虫」を済ませる方が仔犬 の体力的負担は少なく、同時に、その後の成長にと っては育てやすい、と言うのが当研究所のデータ にあります。
④狂犬病予防接種・畜犬登録	3ヶ月 ↓ 4ヶ月	★最初の駆虫により成虫が排泄された場合には、 10~14日以内に2回目の駆虫を実施することがと ても大切になります。
⑤定期的な検便⇒駆虫	5ヶ月 ↓ 6ヶ月	：
⑥以後、年2回は検便⇒駆虫	：	：

〔主に、貧血・発育不全・下痢等の症状〕 ・犬鉤虫 — 小腸、十二指腸粘膜に鉤着 ・犬回虫 — 主に小腸に寄生

いと、健康的な立派な犬に育ちます。この前後から、仔犬達は親犬の食餌に興味を示し始めます。

つまり、生後30~35日を目安に寄生虫駆除を完了した状態で、栄養豊富な母乳を充分飲み、離乳期を迎えるのです。また、仔犬の生活スペースの管理状況など、その後の仔犬たちの習性などに大きく影響を与えます。このことは、新しい飼い主との関わりにも深く関係します。(例えば、音楽やテレビなど音響、車道音、騒音、様々な匂いとか刺激、等々に慣れさせておく。)

【9. “魔の45日”を乗り切る】

前項で仔犬の駆虫について述べましたが実際には、なかなか実行されていないようです。母犬の手元で元気に過ごしている仔犬を見ている限りでは、この駆虫の必要性ということが、実感として判らない場合が多いのです。獣医さんで必ず検便を受けましょう。

ところが、生まれて来た仔犬すべてを自分の手元に置く、ということは先ずありません。親元を離れ、ヒトりで新しい飼い主の許で暮らさなければならぬのが仔犬達に課せられた宿命です。そうした時に

きちんとした健康管理がされている仔犬かどうか、仔犬にとっては命の分れ目にもなるのです。

離乳した仔犬達を観察すると、順調に新しい環境になじみ、元気に過ごしている仔犬ばかりではありません。相談を受ける多くは、下痢便が始まり、食欲が無くなってしまおうようなものです。

今回のタイトル「魔の45日」とは、こうした体の内部の寄生虫の駆除に伴う影響の他に、親から貰ってきた免疫力の低下・自力による造血機能への切替え等が生後45日前後に集中、ここを無事乗り切れるかどうかその仔犬の生命を左右する、ということから付けられたのです。この「45日」を乗り切り、清潔感のある仔犬は、新しい飼い主の許で、愛される存在になるでしょう。

一通りの内部寄生虫駆除が終わり、体調が整ったところでワクチンの接種を受ければ、その後約2週間仔犬の体内にはいろいろな伝染病に対する免疫力が蓄えられ、安心して外出をさせることが出来るようになります。ワクチンの種類については、各地域によって流行している病気の種類等により必要なものが異なる場合もあるようです。地域の獣医師と相談しましょう。

生後45日を過ぎたころから、脳は活発な成長をはじめようになり、社会行動の学習が始まる。



(4) 離乳・旅立ち

【10. 新しい飼い主のもとへ…その準備と対策】

生後45日を無事過ぎて、きちんと駆虫も終えた仔犬達は、1日毎に動作が活発になり、あらゆる事に興味を持って生き生きと動き回るようになります。と、同時にきょうだい同志の「ケンカ」も激しくなり、見ているとハラハラさせられることがしばしば起こります。

この頃から、すでに小さな脳は活発に成長を始め、社会的な学習が始まるのです。こうした「ケンカ」は、私達人間の概念として当てはめる性質のものではないのです。仔犬の成長過程では、とても大切な行動なのです。(別項「噛むと咬む」について”参照)

群れ社会など様々な環境に適応できるための経験を積む第一歩とも考えられ、忍耐強さも学んでいると考えられます。仮に、母犬が側に居ても、決してこの「ケンカ」に割り込んでそれを止めたりはしません。まして、人間が「ダメ、やめなさい！」などと声を上げる必要はありません。元気よく遊んだ後は、きょうだい一かたまりになって寝てしまいます。

また、時として母乳をせがむ仔犬が母犬に寄って行くと、激しく突き飛ばすようにころがしたり、咬むしぐさを見せることがあります。仔犬は母犬にされるがままに、引っ繰り返り腹を上に乗ります。その後は何事も無かったかのように起き、また、いつもの活発な行動をします。

これも、一見、母犬が仔犬をいじめて“かわいそう”なようにも見えますが決してそうではありません。「服従」など付き合うときの大切な学習になっていると考えられています。このことは、新しくその仔犬の飼い主となった人の許で、上手に「家族」の一員になるためにも必要な過程なのです。

こうした様々な現象に加えて、人と仔犬の接し方



↑ どんな抱き方でも馴れるようにする。



↑ お腹を上にして…



↑ 地面に軽く、やさしく抑える…

も大切になります。日一日と可愛さが増し、抱っこ
の時間が長くなり過ぎたり、四六時中仔犬の側に家
族の誰かが付いている結果となったりします。しか
し、新しい飼い主の許へやがては旅立つ、という事
を念頭に置くと、こうした接し方は感心しません。

先に述べた、母犬が仔犬をいじめているような事
も、やがて自立するための言わば教育であり「スト
レス」を教えている、とも考えられる訳です。こうし
た、犬社会の様々なプロセスには相当複雑な葛藤も
含まれていると思われます。従って、人間の欲望の
都合から、「溺愛」に近い状況で接するのは、その仔犬
の将来に多くの苦難をもたらすことになるのです。

多くの仔犬たちは、生まれたところでの環境とか
成長過程によって、新しい飼い主のもとでの「しつ
け」や「学習」に様々な「差」が生じて来ます。

繰り返しになりますが、元気に過ごすこの時期の
仔犬ですが、かと言ってその全てを作者者の手元に
残す訳には行かないのが普通です。生後60日齢まで
を目安に、保存目的に新しい飼い主を見つけ仔犬を
渡しますので、その事を早くから意識して、適切に
対応する必要があります。

【11. 離乳食に触れて・・・】

前項でも述べましたが、一生懸命世話をし育て上
げた仔犬が新しい飼い主の許でも可愛いがられて幸
せに暮らして欲しいと願うのは、作者なら皆同じ
でしょう。

そのための大切な条件の一つが、仔犬の食餌内容
や食習慣です。新しい飼い主の許で最初に与えられ
た食餌を、喜んで食べることができるかどうか、
仔犬にとっての第一の関門なのです。

仔犬は、生後30日頃になると母犬の食餌に関心
を示すようになり、母犬の食器に首を突っ込んで中身
をなめたりします。そのような様子が見えたら、いよ
いよ離乳の準備に入ります。(一緒に生まれた仔犬の
数が多く、母乳だけでは不足している様子が見られ
る場合は、3週令を過ぎた辺りから補乳や補食を始め
るケースもあります。)

内容は犬用ミルクとかおじや(母犬に与える食餌
の汁にニボン粉とかお粥を加えたもの等。)など離乳
食の内容は上記をベースに仔犬用ドライフードをぬ
るま湯で軟らかくしたものや御飯を混ぜても良いで
しょう。まだ、消化器官の発育が充分ではありません
から、栄養を取らせると言ってやたらに濃厚な食餌
を与えるのは、下痢等をさせる原因にもなります。



↑ 間もなく離乳のころ・・・



↑ 乱暴と思えるが・・・実は、母犬のしつけ!



また、喜ぶからと、味の濃いものや高価な食物ば
かりを与えたり、人が食べている時にそれを犬にも
食べさせたりすると、最初に述べた第一の関門でつ
まずくことになります。そして、やたらにおねだりす
る癖が付き、生涯、飼い主を困らせる事になります。
離乳食のもう一つの大切なポイントは、その量です。
「多めに与えておけば適当に残すから」と言って、食
器にいつも餌が残っているような状態を続けていま
すと、仔犬は与えられたものをきちんと食べず、ガラ



ダラと少し食べては遊び、また食べる、というような癖が付いて、新しい飼い主を困らせることになります。では、どの位の量が適切かということは一口には言えません。仔犬の体型や成長の度合いを見て考えなければなりません。「どんな食餌でも喜んで食べる」ことができるようにするには、健康であること・贅沢をさせないこと・いつも控え目の量であること等々の配慮が大切です。「食べさせ過ぎ」によって、下痢などを起こさせる例が多いのです。

最初に与えるおおよその目安としては、生後6週令で一日3食の一回分離乳食が大匙1.5～2杯位でしょうか。この頃になりますと、固いドッグフードを食べることもできるようになるでしょう。勿論、仔犬の成長に従って食餌の量はその体型を見ながら増やしていきます。飼い主の生活条件は様々ですから、どんな環境条件下でもそれに上手に適応できる生活力旺盛な仔犬にするには、過保護にしないこと・贅沢をさせないこと等々が、食生活の面からも求められるのです。

注記：離乳食や母犬の栄養食など様々な「栄養食品とかビタミン剤」が洪水のように販売されていますが、前記の内容を充分ご理解いただく事が肝要です。

【12. 登録に関して・・・】

仔犬が生まれた段階で、事務局へお知らせ下さい。折り返し「登録申し込み用紙」を送ります。登録手続きは、仔犬が生まれてから30日を目安に完了して下さい。初めて作出した場合には犬舎登録も必要です。

「仔犬名」や「犬舎名」その他用紙記載の注意事項に従って正しく記入してください。登録する前に、不幸にして仔犬が死亡又は死産の場合、その旨を所定の欄に記入して下さい。この報告は、将来の繁殖基礎資料としてとても大切なデータになります。

★また、出産した両親犬のカラー写真(縦5×横6cm以上)を添付してください。血統書に印刷されるばかりではなく、将来大事な資料になります。



【13. 里親探しへの協力を！】

信条に掲げたように、仲間として仔犬の里親探しに参加・協力しましょう。詳しくは、表記事務所にお問い合わせください。 (2009. 05. 02 改訂)

